

十二銀行にみる地域金融機関の「脱地域化」

信金中金月報掲載論文編集委員

齋藤 一郎

(小樽商科大学大学院 商学研究科教授)

時に、地域金融機関においては、余資の運用を目的として大都市圏へ飛び地的に出店したり、自らが依って立つ「地域」を外延的に拡大する格好で隣接する圏域に進出したりすることがある。こうした「脱地域化」ともみえる展開は、往々にして地域金融機関側の事情—業容の拡大の追求—によるところが大きい。だがかつて、本拠から遠く隔たった地へと「脱地域化」を図った地域金融機関があった。富山に本店を構えた十二銀行（明治30～昭和18年）である。富山の地主層や売薬商、そして北前船主たちに主導された十二銀行は、業容拡大の新天地として、北海道を目指したのである。

十二銀行小樽支店が設けられたのは、明治32年10月のことである。小樽での支店開設を嚆矢として、その後、十二銀行は北海道各地に支店を展開していった。明治43年8月には札幌支店を開設し、以後、旭川（大正元年）、江別（大正2年）、深川（大正5年）、函館（大正6年）、帯広、野付牛（現在の北見）（大正9年）、釧路（昭和3年）に出店し店舗網を拡大していった。最終的（昭和18年）には、全96店中18店が北海道に置かれた。道外行では、十二銀行ほど北海道で店舗網を拡大した銀行は他になく、かつまた道内行に比しても、その支店数は決して引けを取るものではなかった。

十二銀行が地元富山あるいは北陸地方から他地域へ進出しなければならなかった事情については、偏に地場産業の近代化に遅れがあり、業容を拡大しようとするならば、他地域に市場を求めなければならなかったことによる。明治前期において、北陸3県は農業以外にみるべき産業をもたず、明治後期に入ってもなお売薬、織物以外の諸工業は萌芽的な段階にとどまっていた。とはいえ、十二銀行は茫漠とした期待感から、当時、開拓の進展著しい北海道への進出を図ったわけではない。そこには、富山あるいは北陸地方と北海道を結ぶ「ヒト」「モノ」の流れがあり、流れを辿りながらの「脱地域化」であった。

明治期に入ってから後、北陸地方（新潟を含む）から北海道への移住が盛んに行われた。明治25年から30年間の調査では、その数56万人あまり、移住者全体のおよそ3割を占めたという。職業別（明治31～41年調査）では農業の占めるウエイト（51%）が最も高く、雑業（15%）、不詳（13%）がこれに続いた。雑業に就く者、職業不詳の者の多さは、時代環境の中で

「北海道にさえ渡れば何とかなる」ということの現れだろうか。正業では漁業が10%、商業が7%のウエイトを占めている。

北海道における十二銀行の展開は、こうした北陸地方からの移住者の多さゆえに、容易に運んだ側面がある。移住者は十二銀行にとっての潜在的な顧客であるのみならず、農業や漁業、商業で名を成した者たちが支店開設の際の支援者ともなった。小樽や函館での支店開設時には雑穀商や海産商たちの支援を受け、旭川では入植した富山県人を頼りに支店が設けられた。深川へは同地の富山県人会からの要請に応えるかたちで出店した。団体入植が多かった帯広や野付牛、あるいは漁業従事者に富山の出身者が多かった釧路でも、富山県人会の賛意があったという。こうしたエピソードは、十二銀行の支店開設が移住者との地縁的な結びつきに導かれて進められていったことを物語っている。

「モノ」の流れに関わっては、江戸中期から明治前期にかけて、北前船が日本海を往来していた。関西・瀬戸内地方からは木綿、酒、塩、雑貨類が、北陸・東北地方からは米、藁製品などが北海道に向けて積み出された。北海道からは身欠き鯨や鯨粕、数の子、昆布などが本州各地に運ばれた。北前船は幕末から明治20年代にかけて全盛をみたが、明治後期から大正期においても、これらの物資は汽船や西洋式帆船によって運ばれ続けた。当然「モノ」が動けばそれに伴い「カネ」の流れが生じる。当時、米の輸送に際しては荷為替が組まれたが、その多くは三井銀行小樽支店を仕向先としていた。十二銀行が小樽に支店を開設したのも、直接的にはこうした資金を捕捉するためである。帯広では雑穀関係の荷為替取引が、野付牛では薄荷買い付けの本州業者を相手とした取引が行われた。江別は、同地で鉄路と水運が交差し、米、雑穀の集散地となっていることに着目しての出店であった。

このように、十二銀行の道内展開は「ヒト」「モノ」の流れに沿い、地縁的な関係と商流を辿りながら進められた。また、北海道産の鯨粕は北陸地方の米生産性を高める一方、高価な鯨粕の大量導入は営農費用の増大を招き、農民層の分解—自作農と小作農の分化—を促したという。土地所有に愛着のある小作農は、新天地を求めて北海道へと渡った。移住者の多くは就農し米、雑穀の生産に携わったが、それでもなお開拓途上の北海道では食糧が不足し、北陸地方からは米が北海道に向けて積み出された。やがて北海道の開拓が進捗をみせるようになると、移住者たちが拓いた土地から雑穀類が移輸出されるようになる。十二銀行はこうした「ヒト」「モノ」の流れが交錯する中に「カネ」の流れを見出し、「脱地域化」を図ってきたのである。その意味で、十二銀行の「脱地域化」はまた、隔地を「地域化（地盤化）」するプロセスとして捉えることもできる。